人口問題研究（J. of Population Problems）57－1（2001. 3）pp. 63～77

研究ノート

地域移動と生活設計の変容：少子化・未婚化をめぐる一考察

原　田　隆　司*

近年の日本における少子化の要因である「未婚」化現象の背景として，若年者の地域移動パターンの変化を考察した．

10歳代の後半から30歳代の時期は，かつては，生まれた地域で一生を送る，高度経済成長期のように移動したひとつの大都市圏で生活を続けるなど，中長期的な人生設計のもとに移動することが典型であった．

この20-30年の間に若年者の移動パターンは変化した．地方出身の若年者にとって，移動先の選択肢は多様となり，移動は個人で決定するものとなり，短期的な計画にだけに基づくようになった．大都市での出会いも中長期的な人間関係の形成に結びつかない傾向がある．中長期的な生活設計のもとに地域を選び，Uターン，Iターンと呼ばれる意図的な移動をすることは，少数の例外的な現象にとどまっている．

結婚という決断が先送りされることになった背景には，中長期的な生活設計の決定が先延ばしにされるようになった変化があると推測される．

1.　問題の所在

近年の日本における「少子化」問題の最大の要因は「未婚」化であるとされ，既に多くの議論がある（阿藤1997，金子1995，宮本・岩上・山田1997など）．本稿は，この問題について，若年者の地域移動パターンの変化という側面から新たにアプローチしようとするものである[1)]．

結婚は個人の選択であるという考え方は，現代において顕著になっていると考えられる．そして，「結婚が個人的な出来事と認知されるようになるほど，『探す』，『愛する』，『暮す』・

＊　甲南女子大学人間科学部行動社会学科

1）本稿は，1997-99年度厚生科学研究「少子化についての専門的研究」（主任研究者，平山宗宏日本子ども家庭総合研究所所長）のうち「晩婚化・未婚化の要因をめぐる実証的研究」によるものである．この研究は，阿藤誠（国立社会保障・人口問題研究所副所長）を代表者として，井上俊（京都大学大学院文学研究科教授），坪内良博（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科長），宝月誠（京都大学大学院文学研究科教授），吉田純（京都大学大学院文学研究科助手）との共同研究として行われた（肩書きは当時）．本稿は，この研究成果の一部を筆者の責任においてまとめたものである．この研究に協力していただいた日本各地の皆さん，貴重な助言をいただきました日本子ども家庭総合研究所の皆さん，そして調査の実施と分析に協力していただいた京都大学文学部社会学教室の大学院生と学部生の皆さんに感謝します．また，本稿に貴重なコメントをいただいた『人口問題研究』編集委員会にもお礼を申し上げます．

『働く』,『生きる』・『育てる』, そして『死ぬ』という自分自身の人生の重要な課題と, 結婚生活の課題とのマッチングがより複雑なものとならざるをえない」(正岡1994, p.49). どのような生活がよりよい結婚に結びつくのか, どのような結婚がその後の人生をより望ましいものにするのか. 結婚というものは, 今日, 人生の設計の大きな局面として, 未婚者(その多くは若年者) が自分自身で判断するものとなったと考えられる.

若年者は, 結婚に先行して, 高校卒業後の就職・進学について選択し決定する. ここには地域移動という問題が生じる. とりわけ地方で生まれた人びとの生活設計は, 地域移動ということを意識せずには成り立たない. 実際にそこで長期間過ごすかどうかは別としても, 自分自身の生活設計を考えはじめる頃から, 都市部を中心とした他地域への移動について意識せざるを得ない状況があるであろう.

高校卒業後の地域移動が10歳代後半から20歳代の生活を規定する主要な問題のひとつとすれば, それは結婚という選択にも無関係ではないと考えられる. 従来の未婚研究の多くが, 男性もしくは女性のいずれかの意識だけ, あるいは両者の違いや「ずれ」に焦点をあてていたのに対して, 本研究は, 性差の問題よりも, 未婚の若者たちが直面している（させられている）進学・就職のための地域移動という行動と結婚との関連について取り上げる. なお, この研究は特に地方出身者と地方で暮らす人々を対象として行ったために, 本稿での議論も地方出身者と地方に移動した人々に限定している[2)].

表１は, 大都市圏から離れたところに位置する高知県における高校卒業後の進路を整理したものである. この20年間, 地元（県内）にとどまる割合は30%前後で推移している. 高校卒業の直後に三大都市圏に移動する比率が減少し, 三大都市圏以外の県外へ移動する率が高くなっているのである. この変化は, 移動先の多様化を示していると考えられる.

表１　高知県の高校卒業者の進路

(%)

年*	地元（県内）への就職・進学者	三大都市圏**への就職・進学者	三大都市圏以外の県外への就職・進学者	計
1975	32.8	40.1	27.1	100.0
1980	37.3	32.4	30.3	100.0
1985	35.1	32.0	32.9	100.0
1990	29.8	29.0	41.2	100.0
1995	30.0	23.0	47.0	100.0

(資料：文部省『学校基本調査』)

*各年３月の卒業者
**三大都市圏：埼玉県, 千葉県, 東京都, 神奈川県, 岐阜県, 愛知県, 三重県, 京都府, 大阪府, 兵庫県, 奈良県

2) 本研究は, 時間的な制約などから, 都市部出身の人々を対象とした調査は実施していない. しかし, 本稿で取り上げるような生活する場の不安定性は都市部出身者についても該当するのではないかと考える. 進学・就職の選択肢が多様となり, また移動することが困難ではなくなった現在, 都市部であっても出身地で生活を続けることが特別な意味をもっているとは考え難いからである.

本稿では，１）未婚期における大都市での出会いがその後の人間関係の形成に結びついていないのではないか，ということを示し，２）これとは対照的に，数の上では少数であるが，Ｕターン，Ｉターンと呼ばれる意図的な移動経験者は，比較的早い時期から生活設計をたてて地域を選び，結婚に至っていることを示す．そして，３）10歳代後半から20歳代において，地元に留まることも含め，地域移動の選択範囲が広くなったことが，結果として，自分の生活設計を最終決定する時期を遅らせ，それが未婚期間の長期化をもたらしている，という仮説を提示する．

2.　地域移動と結婚

(1)　地域移動と意識の変化

結婚に関する意識をとらえるために，高知県下のある市に位置する高等学校の卒業生で，32-34歳，42-44歳の人々を対象とし，郵送調査を実施した．高校卒業後から３歳きざみで19歳，22歳，25歳，28歳の４時点における居住地の変化，日常的なつきあい，生活満足度，居住継続の意思，生活設計の見通し，結婚に関する意識などについて，同一質問を用いて比較した．この調査は1998年２月に実施し，発送数は947，有効回答数は175，回答率18.5%であった[3]．世代間の違いはみられなかったため，ここでは全体の傾向を示した．

表２，３，４には，結婚の意思と他の回答との関連性を時点別にまとめた．どの時点においても，「結婚したくない」と考えていたという回答者はきわめて少ない．結婚の意思の強さが相違すれば，結婚を話題にする頻度，結婚しなければならないと感じる程度にも相違がある．「特に何とも思わなかった」場合には，家族とも家族以外とも「あまり話さなかった」という回答の比率が高い．また，家族よりも家族以外の人と話題にするほうが多い．

回答者のうち既婚者について，配偶者と知り合ったきっかけをまとめると，「仕事・職場」がどの時点でも多く，しかも結婚年齢の上昇と共にその比率は上昇する（表５）．これとは対照的に，「学校の同級生・先輩・後輩」「遊びの場」「友人の紹介」は年齢の上昇と共に減少する．また，結婚年齢が22-25歳と25-28歳のグループでは「見合い」が10%以上となっている．

表６は，18-21歳，22-24歳，25-27歳という結婚年齢別の３グループに，28歳時点で未婚であったグループを加えた計４グループ間で，未婚期間（未婚の場合は28歳まで）における移動歴を比較したものである．18-21歳で結婚した人たちの約半数は市外への移動歴がなく，結婚年齢の上昇と共に，その割合は減少し，逆に大都市圏への移動歴ありの割合が上昇する．28歳時点で未婚の人たちが最も高率となっている．

28歳時点で未婚の人たちの意識を，加齢による影響を少なくするために，25-27歳で結婚した人たちに限定して比較した（表６，７，８，９）．28歳時点で未婚の人たちは，25-27歳で結婚した人たちと比較して，「時間を過ごす際に最も大切にした人たち」として「仕事・

3）175名の回答者は男性が40.0%，女性が60.0%，30歳代が50.9%，40歳代が49.1%である．ケース数が多くないこと，世代間では大きな差がなかったこと，そして，先に触れたように性別ではなく未婚・既婚の区分を中心にしたために，ここでは男女別の考察はしていない．

表２　「結婚の意思」と「家族と結婚を話題にした程度」

(%)

	家族と結婚を話題にした程度							
	よく話していた	時々話していた	あまり話さなかった	計	よく話していた	時々話していた	あまり話さなかった	計
	19歳				22歳			
早く結婚したい	0.0	22.2	77.8	100.0(9)	31.3	25.0	43.8	100.0(16)
いずれは結婚したい	0.0	10.3	89.7	100.0(68)	4.4	26.7	68.9	100.0(90)
結婚したくない	20.0	0.0	80.0	100.0(5)	20.0	20.0	60.0	100.0(5)
特に何とも思わなかった	1.1	2.2	96.6	100.0(89)	0.0	2.0	98.0	100.0(49)
計	1.2(2)	6.4(11)	92.4(158)	100.0(171)	6.3(10)	18.8(30)	75.0(120)	100.0(160)
	25歳				28歳			
早く結婚したい	48.0	28.0	24.0	100.0(25)	39.1	47.8	13.0	100.0(23)
いずれは結婚したい	14.7	45.6	39.7	100.0(68)	8.1	62.2	29.7	100.0(37)
結婚したくない	0.0	42.9	57.1	100.0(7)	0.0	33.3	66.7	100.0(3)
特に何とも思わなかった	0.0	10.5	89.5	100.0(19)	0.0	38.5	61.5	100.0(13)
計	18.5(22)	36.1(43)	45.4(54)	100.0(119)	15.8(12)	52.6(40)	31.6(24)	100.0(76)

（　）内は回答数
質問　結婚の意志：ご自身の意思としては，結婚についてどのように思っていましたか.
　　家族と結婚を話題にした程度：ご自身の結婚について，家族と，どの程度話していましたか.

表３　「結婚の意思」と「家族以外の人と結婚を話題にした程度」

(%)

	家族以外の人と結婚を話題にした程度							
	よく話していた	時々話していた	あまり話さなかった	計	よく話していた	時々話していた	あまり話さなかった	計
	19歳				22歳			
早く結婚したい	22.2	33.3	44.4	100.0(9)	28.6	35.7	35.7	100.0(14)
いずれは結婚したい	2.9	27.9	69.1	100.0(68)	10.1	48.3	41.6	100.0(89)
結婚したくない	20.0	40.0	40.0	100.0(5)	20.0	20.0	60.0	100.0(5)
特に何とも思わなかった	3.4	9.1	87.5	100.0(88)	0.0	22.4	77.6	100.0(49)
計	4.7(8)	18.8(32)	76.5(130)	100.0(170)	8.9(14)	38.2(60)	52.9(83)	100.0(157)
	25歳				28歳			
早く結婚したい	68.0	20.0	12.0	100.0(25)	60.9	30.4	8.7	100.0(23)
いずれは結婚したい	16.4	62.7	20.9	100.0(67)	5.4	59.5	35.1	100.0(37)
結婚したくない	0.0	14.3	85.7	100.0(7)	0.0	33.3	66.7	100.0(3)
特に何とも思わなかった	0.0	15.8	84.2	100.0(19)	0.0	30.8	69.2	100.0(13)
計	23.7(23)	43.2(51)	33.1(39)	100.0(118)	21.1(16)	44.7(34)	34.2(26)	100.0(76)

（　）内は回答数
質問　結婚の意志：ご自身の意思としては，結婚についてどのように思っていましたか.
　　家族以外の人と結婚を話題にした程度：ご自身の結婚について，家族以外の人たちと，どの程度話していましたか.

職場の人たち」を回答する率が低く，「学校（時代）の人たち」の率が高い．また，「一人で過ごす」時間を最も大切にしたと回答する率が，25-27歳で結婚した人たちよりも高い．このことより，高校卒業後移動をした若年者の中で，新しい人間関係を築く機会が少ないと考えられる人たちにおいて未婚期の長期化する傾向があるのではないか，と推測される．

表４　「結婚の意思」と「結婚しなければならないと感じていた程度」

(%)

	結婚しなければならないと感じていた程度							
	強く感じていた	少し感じていた	ほとんど感じていなかった	計	強く感じていた	少し感じていた	ほとんど感じていなかった	計
	19歳				22歳			
早く結婚したい	0.0	22.2	77.8	100.0(9)	56.3	37.5	6.3	100.0(16)
いずれは結婚したい	0.0	10.3	89.7	100.0(68)	0.0	34.4	65.6	100.0(90)
結婚したくない	20.0	0.0	80.0	100.0(5)	0.0	20.0	80.0	100.0(5)
特に何とも思わなかった	1.1	2.2	96.6	100.0(89)	0.0	0.0	100.0	100.0(49)
計	1.2(2)	6.4(11)	92.4(158)	100.0(171)	5.6(9)	23.8(38)	70.6(113)	100.0(160)
	25歳				28歳			
早く結婚したい	80.0	20.0	0.0	100.0(25)	73.9	26.1	0.0	100.0(23)
いずれは結婚したい	1.5	63.2	35.3	100.0(68)	5.4	64.9	29.7	100.0(37)
結婚したくない	0.0	14.3	85.7	100.0(7)	0.0	0.0	100.0	100.0(3)
特に何とも思わなかった	0.0	0.0	100.0	100.0(19)	0.0	7.7	92.3	100.0(13)
計	17.6(21)	41.2(49)	41.2(49)	100.0(119)	25.0(19)	40.8(31)	34.2(26)	100.0(76)

(　) 内は回答数

質問　結婚の意志：ご自身の意思としては，結婚についてどのように思っていましたか.
　　結婚しなければならないと感じていた程度：ご自身の結婚について，家族と，どの程度話していましたか.

表５　結婚年齢別の配偶者と知り合ったきっかけ

(%)

配偶者と知り合ったきっかけ	19歳－21歳で結婚	22歳－24歳で結婚	25－28歳で結婚	計
仕事・職場	27.3	35.7	40.9	37.1 (36)
学校の同級生・先輩・後輩	27.3	16.7	13.6	16.5 (16)
学校以外のクラブ・サークル	9.1	2.4	9.1	6.2 (6)
遊びの場	18.2	4.8	4.5	6.2 (6)
旅先	0.0	2.4	0.0	1.0 (1)
家が近所	0.0	2.4	0.0	1.0 (1)
友人の紹介	18.2	11.9	11.4	12.4 (12)
見合い	0.0	14.3	13.6	12.4 (12)
職業的仲人・結婚相談所	—	—	—	— (0)
その他	0.0	9.5	6.8	7.2 (7)
計	100.0 (11)	100.0 (42)	100.0 (44)	100.0 (97)

(　) 内は回答数

表６　結婚年齢別の未婚の時期における地域移動歴の比較

(%)

	出身市内	高知県内	四国内	大阪圏	名古屋圏	東京圏	左記以外	計
19歳から21歳で結婚	45.5	9.1	0.0	27.3	0.0	18.2	0.0	100.0(11)
22歳から24歳で結婚	21.4	9.5	7.1	35.7	7.1	14.3	4.8	100.0(42)
25歳から27歳で結婚	18.6	14.0	7.0	25.6	9.3	18.6	7.0	100.0(43)
28歳時点で未婚	15.8	11.8	7.9	35.5	3.9	22.4	2.6	100.0(76)
計	19.8	11.6	7.0	32.6	5.8	19.2	4.1	100.0(172)

(　) 内は回答数

未婚の時期において，居住地別の移動パターンを示した．「出身内」は市外での居住経歴がない，「高知県内」は県外での居住経歴がない，「四国内」は四国の外での居住歴がないことを示している．

表７　未婚・既婚の比較―交際相手の相違

(%)

	仕事・職場の人たち	学校（時代）の人たち	クラブ・サークルの人たち	近所の人たち	一人で過ごす	計
25歳から27歳で結婚	48.8	34.9	11.6	2.3	2.3	100.0（ 43）
28歳時点で未婚	36	42.7	10.7	1.3	9.3	100.0（ 75）
計	40.7	39.8	11	1.7	6.8	100.0（118）

（　）内は回答数
質問　交際相手：家族以外では，どのような人たちと過ごす時間を大切にしていましたか．
最も大切にしていた人たちを，次の１～５から選んでください．

表８　未婚・既婚の比較―居住継続の意思

(%)

	ずっと住み続けたい	当面は住み続けたい	住み続けたくない	特に何とも思わなかった	計
26歳から27歳で結婚	27.9	25.6	20.9	25.6	100.0（ 43）
28歳時点で未婚	26.3	23.7	26.3	23.7	100.0（ 76）
計	26.9	24.4	24.4	24.4	100.0（119）

（　）内は回答数
質問　居住継続の意思：もし事情が許せば，住んでいた地域にその後も住みつづけたいと思っていましたか．

表９　未婚・既婚の比較―生活設計

(%)

	当面のことだけ考えていた	数年先のことまで考えていた	10年くらい先まで考えていた	10年以上先のことまで考えていた	計
25歳から27歳で結婚	25.6	60.5	7.0	7.0	100.0（ 43）
28歳時点で未婚	36.8	46.1	10.5	6.6	100.0（ 76）
計	32.8	51.3	9.2	6.7	100.0（119）

（　）内は回答数
質問　生活設計：自分自身の生活について，どの程度先のことまで考えていましたか．

未婚期に生活設計が長期的に（10年またはそれ以上）できていたという回答は全般的には多くない．しかし，25-27歳で結婚した人たちは，28歳時点で未婚の人たちよりも，「数年先のことまで考えていた」率が高い．

以上の調査結果から直ちに断定的なことは指摘できないが，大都市圏など出身地の外への移動に伴い，生活の場の不安定化，人間関係の変化（それまでの人間関係を継続することが容易ではないので，新しい人間関係を築く必要がある）に直面している状況がうかがえる．また，中長期的な生活設計と結婚との間に何らかの関連があることが示唆される．結婚の意思があるにもかかわらず未婚の期間が伸びている背景に，このような状況が絡んでいる可能性も推測されるのである[4)]．

4）意識調査，とりわけ過去の事実経過だけでなく意識を問うような調査の場合，回顧することによって生じる「バイアス」の問題がある．そのような限界は，結婚といった主題においては，調査方法にかかわらず生じるものだといえるだろう．

3.　意図的な地域移動とその意識－Ｕターン・Ｉターン－

中長期的な生活設計をたてた地域移動が，Ｕターン，Ｉターン現象と考えられる．ここでは，はじめに地方出身で大都市圏に居住する人たちのＵターンの意識について考察し，次いでＵターンとＩターンの実践者からインタビューした結果をまとめる．

(1)　大都市圏で生活する地方出身者のＵターン意識

大都市圏で生活する人びとの生活設計とＵターンに関する意識について，高知県と同じように若年者の県外への移動が続いている宮崎県の出身で大都市圏（近畿圏，東京圏）[5)]に生活する30歳代前半の人びとを対象として郵送調査を行なった（1998年11月-1999年２月）．宮崎県下の11の高等学校・高等専門学校の卒業生で大都市圏で居住している人たちを対象とした．対象者数は803，回答者数は233（回答率29.0%）であった．

全体の傾向をみると，高校・高専に入った頃は，将来の生活の場について明確に考えていたという人は少ない（表10）．大都市は，実際に住んでみて「便利」であるが，それを「魅力」とは思わず，出身地に戻りたいという意向もかなりある（表11）．親の面倒をみないといけないこと，家族や友人がいること，また子育ての協力を期待できるという指摘もあった．これに対してＵターンの意思がない人たちは，仕事には生き甲斐を感じているが，大都市という場所そのものに魅力があるとはいい難いと考えている．たとえば，子育ての場として，老後を送る場として，大都市圏は否定的にとらえられている．

多様な回答のなかから，未婚の人たちの考え方を紹介しておこう．

表10　高校・高専入学時における将来の展望

(%)

出身市町村およびその周辺	宮崎県内の他地域	県外の大都市圏（東京，名古屋，大阪，福岡など）	それ以外の地域	特に考えていなかった	計
18.1	9.1	33.2	3.4	36.2	100.0（232）

（　）内は回答数
質問　将来の展望：高校・高専に入学された頃，ご自身としては，将来どこで生活しようと思っていましたか．

表11　将来のＵターンの意思

(%)

	非常にある	かなりある	ある程度ある	あまりない	計
未婚者	10.5	21.1	38.6	29.8	100.0（ 57）
既婚者	22.3	12.0	36.0	29.7	100.0（175）
計	19.4	14.2	36.6	29.7	100.0（232）

（　）内は回答数
質問　Ｕターンの意思：もし事情が許せば，将来，宮崎県に戻って住みたいという気持ちは，どの程度ありますか．

5）ここでは，「近畿圏」は滋賀県，京都府，大阪府，兵庫県，奈良県，和歌山県，「東京圏」は，東京都，埼玉県，千葉県，神奈川県である．

○男性，30歳

高校卒業後，進学のため18歳で福岡へ．19歳から近畿圏へ移動．近畿圏は「希望するものが容易に手に入る．旅行しやすい．様々な人間と知り合いになれる」が「住み続けたくない」．一方，出身地は「スポーツする施設・環境が豊富．人混みがない」．しかし，戻って住みたいという気持ちは「ほとんどない．知人のほとんどが地元を離れているうえに，働き場所がなく，将来のプランが立てられない．福岡，熊本，鹿児島には住みたい気持ちがある」．

○女性，32歳

26歳で就職のため出身地を離れて近畿圏へ移動．「なかなか慣れるのが難しい」と思ったが「史跡の多さ，交通が便利，情報が多く得られる，勉強したいことややりたいことがしやすい環境」であり「当面は住み続けたい」．これに対して出身地は「家族・友人と会える．気候が温暖，水がきれい，地域との結びつきが強い」．戻って住みたいという気持ちは「ある程度はある」．通信制の大学を卒業後「今の仕事を続けるか，帰るかを検討中」．

最初の回答者の「知人のほとんどが地元を離れているうえに，働き場所がなく，将来のプランが立てられない」というコメントは，現代において人間関係を累積的に築くことのできる場が失われてきたことを示唆していると考えられる．出身地では進学先や就職先が限られているために生活を継続することが難しく，大都市圏での生活は実際にはそれほど魅力的ではないという現状が，地方中核都市志向となって表れている．それが「福岡，熊本，鹿児島には住みたい気持ちがある」という判断である．近年の若者たちの移動先は，かつてない程に多様になっていると推測できる．後の女性回答者の，当面は大都市圏に住みつづけたいが，戻ってみたいという気持ちも「ある程度ある」ので，「今の仕事を続けるか，帰るかを検討中」というコメントは，長期的な生活設計をして移動するということが容易ではないことを示していると考えられる．

(2)　Uターン経験者の意識

それでは，実際にUターンを経験した人々は，地方と大都市圏の間の移動について，どう考えているのであろうか．高知県下の中山間地において，同一町内のUターン経験者から，世代別の比較に焦点をあてて，各世代の人たちにインタビュー調査を実施した．その一部を，世代間の比較と現代の若者たちに関係する部分を中心にして紹介しておきたい．なお，ここにあげたのは，いずれも既婚の人たちである．

○昭和20年生まれの男性（昭和38年高校卒業後に大阪へ，２年後にUターン）

「働くなら都会ぐらいしか頭になかったですね．とにかく都会でしたね．中学校，高校あたりから，その後をどうしようかっていう考えがもともとあったみたいな感じもしますが．都会に憧れた時代ですのでね」

―帰ってくることは考えていましたか？「考えてませんね．まず田舎に帰るということは」

―今は昔ほど出るのが当然ではなくなりましたか？「そら，ないですね．今の子供は，そんな

に兄弟がたくさんおるような人も最近おらんしね．なるべく親としては近くにおりたいんじゃないですか．それに，道路事情も僕らの若い頃と相当変わってますのでねえ」

―ここにずっといるのと都会に出るのとでは大きな差はありませんか？「ないですね，今は．けっこう高知市あたりで都会的なところもあるしね．大学を出て一流企業に就職した人は別として，高校出ていって企業に入ってですね，まあ人にもよるでしょうけど，本音としてはやっぱり田舎に住みたいかもわからんですね．昔と違って，出て行くのが当たり前という感覚もないと思いますけんね．子どもは多くても２，３人ですからね，親としては近くにおきたいという感覚もあるかもわからんですね」

○昭和17年生まれの男性（昭和36年高校卒業後に大阪で就職．４年後にUターン）

「青年なんかと付き合いあるんですけど，やっぱり職場もほしい．統一した考え方ですよねえ．こちらで生活できて，若者が退屈もせずに，都会なみに刺激のある遊び場所があれば，田舎におりたいと，家におりたいと，それはみんな思てますねえ．もちろん都会に憧れて行く人もあるでしょうけど．地元にすむ要因に，安定した仕事がほしい，今の時代は若者は文化的な生活に憧れますし，ひとつの家で親と同居するよりは，文化的な住宅へ入ってという気持ちもありますね」

○昭和44年生まれの女性（昭和59年中学卒業後に高知市内の高校へ，卒業後東京圏に出て短大を卒業，２年間の就職を経て結婚後Uターン）

―現在の若者の意識について「家から通える範囲内での仕事じゃないでしょうかね．家から通える範囲内で町外で仕事してる子はいますけどね．今は車でスッと出ていけば，遊び場所，テーマパークもあるし，土日をかければ大阪でも行こうと思えば行けるし．ですからそんなに都会と区別はないんじゃないでしょうか．都会自体にそれほど，今の若い子は，魅力を感じてないんじゃないのかねえ．地元に仕事があれば地元にね，残りたいと思ってるんじゃないでしょうかね」

○20歳代後半の男性（高校を卒業後，高知市内に就職してから１年後に地元企業にUターン就職）

「高校出て高知で勤め出して，それから３回４回ほど仕事を変えて，自分の父親が病気になって，すぐ帰ってくることに…．僕は次男なんですけど，長男がもう出てますんで．いずれは戻ってこようと思ったけど，これほど早くなるとは思ってなかったです．帰って来て良いなあと思うことはないね．ずっと都会にあこがれていたしね．出ていったらなじめないっていうか，田舎者は田舎者と再確認しましたね．空気がうまいし時間が経つのは遅いしね．でも外で働いてみると田舎は田舎のええ所もあるかなという気はしますね．すぐに飽きるけど．はじめはそういう考えはなかったけどね，都会へ出て色々な世界を見たいなという気はあったけどね．都会も今もええとは思うけど，住んだあと都会を見ると，遊びに行くにはええ，でも住んだら大変やなあと」

―今は，外に出たいという強い希望を持っている人は余りいない？「それはそれで一概に言

えない．やりたい仕事があれば出て行くけどね．とりあえず流されているわけで，自分の意思でどうのこうのしているわけじゃないんで．専門学校とかねそういう所を出た子はそういう意識を持っていると思うんですよ．それは意識があるから専門学校へ行く．僕らは行ってないでしょ，だから時に流されてっていうような感じがあるのかもしれませんな．仕事さえあれば問題ないわね．自分が好きな仕事と収入があればどこでも問題はないと思う」

30年程前には，大都市圏で仕事を続けることが前提であった．しかし10年程前からは，「地元志向」が強くなっている．その背景としては，交通の整備や情報化により，近距離の範囲で都市的なライフスタイルを手に入れられるようになったことが指摘されている．

その結果，人生をどこで過ごすかは個人の選択となり，いくつかの具体的な居住地を選択できるようになり，大都市にあこがれ，そこでの生活を志向する人たちがいる一方で，可能であれば地元で過ごしたいという人もいるのが現状のようである．選択肢が多様になったということは，かつてよりも生活設計を最終決定するタイミングが遅くなっていることを意味すると考えられる．

(3)　大都市と地方の共通性

時代によってこのような違いが生じた背景には，日本の地方と大都市との関係が大きく変化したことがあるだろう．大都市との関係における農山村の変化のひとつは，徳野貞夫によれば，移動性と流動性が高くなったことである．

「現在の農山村居住者と昭和30年代以前の居住者を比較した場合，一つの特徴は，住民属性の移動性（転居・来住などの長期間移動）や流動性（日常生活のなかでの通勤・通学などの移動）が非常に高くなっていることである．（中略）山口県下で行った調査によれば，20歳台から30歳台では３分の１が土着型居住者，３分の１がUターン型居住者，３分の１が来住型居住者になっている．特に，男性ではUターン型，来住型を合わせると６割近くが移動歴を持っていた．一方，女性では『結婚するまでは他所で暮らしていた』が45.9%であるが，30歳以上（既婚者中心）では９割近くになる」（徳野1998, p.157）．

これは，より詳細に検討すると，次のような地域間の違いから生じる．

「農山村ほど伝統的な結婚圧力（結婚するのが当たり前という社会意識）が高い．その結果，30歳を過ぎて結婚していない女性に対する風当たりは強い．（中略）しかし，現在，女性でも産業構造の変化や高学歴化さらには地域移動の増大によって，未婚者に風当たりの強い農山村に暮らさなければ生活できないという状況ではなくなった．だから，故郷に帰れば『結婚，結婚』という親や周囲から離れて，若い女性は都市部に滞留する．その結果，農村部の男性はますます結婚対象者不足となってくる．（中略）次に明白なこ

とは，未婚率のパターンは男女によって地域差があるということである．すなわち，女性の未婚率は都心部，中核都市，都市近郊，中山間地，山間地の順で低くなる．いいかえれば，この順で独身女性が少なくなっているのである．(中略）一方，男性の未婚率は，都市部で高く，近郊農村で低く，過疎農山村で再び高くなるというＶ字型になっている．すなわち，近郊農村は家や地域の婚姻圧力も高いが，都市部とのアクセスも容易なため未婚女性との接触チャンスが多く，婚姻率が高くなるのである．しかし，過疎農山村では周囲の結婚圧力が高くても，肝心の未婚女性がいないから花嫁不足が地域問題化してくるのである」(徳野1998，pp.178-179)．

同様の指摘は，国土庁計画・調整局編（1998）にもある．「国勢調査によって，都市規模別の年齢別女子未婚率を比較すると，大都市部及び地方部で未婚率の高いことが分かる」(p.55）というデータが示されている．市町村区の人口規模と年齢別未婚率の関係が分析され，次のような結果が得られるという．

「年齢層が高いところで，人口規模１万人程度で最も未婚率が低く，人口が大きくなる，あるいは小さくなるにつれて，未婚率が高いという関係がある．したがって，大都市部あるいは，人口規模の極めて小さい町村において，高年齢層で未婚率が高く，都市化が晩婚度を高めている可能性があることが分かる」(国土庁計画・調整局編1998，pp.57-58)．

そして，「女性の労働力率が高い地域ほど，晩婚度は高いものの非婚度が低く，女性が結婚しやすくなっている．(中略）女性が働き続けやすい地域ほど，結婚もしやすいことを意味しているといってよいだろう」と指摘されている（国土庁計画・調整局編1998，p.78)．

都市部では男女とも未婚率が高く，過疎農山村では男性の未婚率だけが高い．そして，近郊農村では，男性の未婚率は低い．本研究の観点から言い換えれば，生活設計が長期的に確立できない大都市部と，男性だけが長期的な生活の場と決定している過疎農山村において未婚率が高い，ということになるだろう．

(4)　Ｉターンという現象

近年になって，大都市圏出身者が地方に移動するＩターンとよばれる現象が注目されるようになった．現在のところは特別な移動パターンであり，件数は多くないが，そこからは現代の若者の長期的な生活設計に関する示唆が得られる．北海道と新潟県で実施したインタビュー調査のなかから，生活設計についてのコメントをいくつか紹介しておきたい．ここで取り上げたＩターン者もいずれも既婚である．

○北海道在住の男性（35歳）神奈川県川崎市出身，大学から北海道へ．

―北海道への憧れについて「漠然と，中学生のころからですね．北海道にいきたいということ

で，北海道の牧場ということにあこがれました．来て10年間，広いとこ車で走ってますよね，周り見渡してなんか景色見ながらね，走ってる音がいいなと思います」

―人間関係について「都会はもうまるっきり無視しちゃうっていう部分もあるんですけども，やっぱりひとりひとりがね，人間味にあふれてるし，もうそこに慣れちゃったらもうこっちのもんだっていう，自分のペースに相手引き込んじゃったりして．だから，そうなったらもう，住みやすい環境ですよね．つらかったのはですね，都会だったら会社から一歩外出れば，もうまったく別世界ですよね，プライベートですけど，ここにはプライベートなんかないんだなって．どこ行っても知った顔だし」

○北海道在住の夫妻（夫33歳，妻30歳）

夫は東京出身，北海道の大学を出る．妻は愛知県出身．

夫 「北海道が好きだし，山登りが元々好きだったもので，大学時代にも登った．北海道のこういう寂しいふうなところっていうのは割と好きですよね．牧場っていうのは，北海道で家族経営でやってる酪農っていうのに，いいなと思って．こじんまりとしてるけれども，家族で一生懸命やっていく，そういう酪農の姿がいいなと思って」

妻 「高校卒業して，１年ＯＬをしまして，アルバイト情報に載ってたところで研修をしたんです．道東の方の，牛の牧場で働きたい，という条件ですね．牛やるんなら九州か北海道かなって，パッと頭に浮かびますよね．で，暑かったから北海道にしようかなと思った（笑），全然深く考えないで，東の方がいいかな，くらいですね（笑）」

○北海道在住の男性（39歳）

愛媛県出身，神戸で就職した後，北海道へ．現在は自営業．

「オートバイに乗り始めて世界ががらりと変わったわけですよ．国鉄の周遊券とか使って九州とか行ってたんですけどね．当時から移動することが好きだったわけですよ．オートバイ，これはいいものを見つけたと思ったわけですよ．どっか行こうって走って快適というのは分かりますよね．東京や神戸は快適ではなかった，ストップ・アンド・ゴーの繰り返しというのは，やってられるか，と思う．けど，フェリーから下りて走ったときの気持ちというのは世界が全然違いますよ．21歳の時かな．［理由は］いろいろあるんですけど，半分は現実からの逃げですよね．つまんない毎日，逃げようって，やめれば何とかなるだろうって．会社もそうだし，人間関係とかもね」

○新潟県在住の男性（神奈川県出身，35歳）

［あちこちを移動して生活してみた結果］「落ち着ける―いい人悪い人じゃないですよ―自分にとって合う人がいるかどうかというふうに思って，すごく落ちつける，話せる人がいるとか，本をくれたりとかする，という人が多くて，それで，人間的な部分で［ここに落ち着く］というふうになりました．ただ，それは他の方たちも全員というわけじゃないと思います．僕は，自分にとってですから，やっぱり人それぞれ合うところ合わないところがあると思います」

この５人のうち，はじめの２人のように，小さい頃から酪農や北海道への憧れを抱いてきた人たちは，進学先なども北海道で住むことを考慮して選択している．職業上の困難や人間関係などの問題も克服した人たちは，現在の住み心地を肯定的に判断している．こうしたＩターン実践者の考え方は，自分の生活設計を10歳代の頃から確立することができて，それを実現できたことへの満足と誇りに裏打ちされている．先に取り上げたＵターン者の場合も，自分の判断で地元（出身地）で人生を送ることを決断したのである．いずれの場合にも，比較的若い頃に，自分の人生設計をたてて，それを実現することができたのである．

ＩターンとＵターンの実践者は，現時点において少数派あるいは例外的な現象に留まっている．このことは，裏返していえば，多くの若年者は中長期的な生活設計をたてて移動しているのではないことを示唆しているのではないだろうか.「自分に合う場所」を探して移動してきたというＩターン者の最後の３人のように，その都度生活の場を探していくという考え方は，一定の場所に住みつづけることを前提としない新しいライフスタイルの模索として解釈することができるであろう．これは，先にみた地方出身で大都市圏に生活する人たちの考え方とも重なるのである．

4.　生活設計の変容

以上の結果から推測されることは，この20-30年の間に若年者の生活設計についての意識が変化したことである．かつてのように，生まれた地域で一生を送ることも，高度成長期の若年層に顕著であった10歳代後半から20歳代前半で移動したひとつの大都市圏で生活を続けることも，当然のことではなくなったのではないか．もちろん現在でも，地方出身の人びとにとって，進学・就職のために出身県を離れることは当然であるが，それは，移動したひとつの地域に継続的に住むということではない．また，仕事があれば地元で生活したいという傾向は，近年次第に顕著になりつつある．しかし，職業選択の多様性・絶対的な機会の数，それに結びつく教育機関の選択肢など，人生を設計する際の基本となる機会は十分ではない．依然として,「出身地がどこであれ，都市圏に集中する大学，短大，専門学校で学生時代を送り，そのまま都市圏で就職，家庭を持つ．そうするのが当たり前のように．その路線から少しでもはずれると，生活のあらゆる側面で不効率なことが起こってくる」という状況は基本的には変化していない（雇用開発センター1997，p.140）.

ＵターンやＩターンを志向する傾向が潜在的には強いとしても，それを実現するのは余程の決断力と覚悟をもっている場合に限られるだろう．多くの若年者にとって，生活する場所の選択肢が増えたことが，中長期的な設計を困難にしているのではないだろうか.

戦前から戦後にかけて日本中を歩き，人々の意識をじかにとらえて表現し続けてきた民俗研究の宮本常一は，1964年に，次のように指摘している．

「かつて地方における農家も商家も世襲せられていくものであった．そして人間に生命力があるように家にも生命力があった．いわゆる永続農家には数百年も続いたものが

少なくなかった．(中略) 都市にあっては家の生命はさらにはかないものである．戦前においてさえ，東京で一定の場所に五代住んだ家は数えるほどしかなかった．家という形でなしに親，子，孫と伝わっていくそれぞれの世代がそれぞれ生活をたてていく場合は少なくないであろうが，親，子，孫でそれぞれ職業がちがい，また住所が違うとなると，家によって継承せられる文化はなくなる．(中略) やはり定形を持ち難い浮動性のつよいものになる．(中略) われわれの生活そのものが自主性も計画性も乏しいものだからである．かつて人が居住を定めるときには土地の条件をしらべ，将来を考え，できるだけ将来に対して持続性のある土地が選ばれた．しかし多くの人が今都会で家を求めるのはまったく便宜的である．そこに入手しやすい土地があるとか，または家があるとかいうことで住みついたものが多く (中略) そのことの中にすでに機会主義があり，甚しい不安定性がある．そして周囲の条件と状況に支配せられて生きていくことになる」(宮本常一1964，pp.48-49)．

多様なメディアに接触できるようになった今日，出産から幼児期の教育，学校，就職，異性間の交際，結婚，仕事と生きがい，老後，そして死に方の問題まで，どう生きるべきかという情報が，たくさんの実例とともに伝えられるようになった．身近な人たちの生き方だけではなく，一度も会ったこともない人たちの多様な事例に触れることで，自分の人生設計について考える機会は多くなり，選択肢も増え続ける．そして，選択と決定が自分自身に委ねられるために「甚しい不安定性」は，現在において，ますます顕著になっているのではないだろうか．

10歳代後半から30歳代くらいまでの時期，それは，かつては人生の設計について最終的な決定をしていた時期であるが，現在においては，就職や進学について個人がさまざまな選択肢のなかから選び，その都度決定するという時期へと変容していると推測される．その結果，中長期的な生活設計をする時期は先延ばしとなり，結婚という決断も先送りされることになっているのではないかと推測されるのである．

＜文献＞

阿藤誠 (1997)「日本の超少産化現象と価値観変動仮説」『人口問題研究』 第53巻１号，pp.3-20.

金子隆一 (1995)「わが国女子コウホート晩婚化の要因について―平均初婚年齢差の過程・要因分解―」『人口問題研究』 第51巻２号，pp.20-33.

国土庁計画・調整局編 (1998)『地域の視点から少子化を考える―結婚と出生の地域分析―』.

雇用開発センター (1997)『Uターン現象の実態と課題―地域間労働移動と新たな雇用創出に向けて―』.

正岡寛司 (1994)「結婚のかたちと意味」『家族社会学研究』 第６号，pp.45-52.

宮本常一 (1964)「日本列島にみる中央と地方」『宮本常一著作集』 第２巻，未来社，pp.7-60.

宮本みち子・岩上真珠・山田昌弘 (1997)『未婚化社会の親子関係―お金と愛情にみる家族のゆくえ―』 有斐閣.

徳野貞雄 (1998)「農山村における『花嫁不足』 問題」山本努・徳野貞雄・加来和典・高野和良『現代農山村の社会分析』 学文社，pp.171-190.

Changing Patterns of Spatial Mobility and the Problem of Life Plan among Japanese Youth: An Analysis of a Factor of Late Marriage Effecting the Decline of the Fertility Rate

Takashi HARADA

This paper deals with the changing patterns of spatial mobility among Japanese youth, as a background of late marriage, a main factor of the recent decline of fertility rate.

Until 1960s there were typical patterns of spatial movement: moving to the metropolitan areas for higher education and/or job opportunities, or staying at their birthplaces. These were based on the decisions of long-term life plan among family members.

Recently Japanese youth has many options where to go and what to do in various areas. Their decisions are, as our survey shows, based on rather short-term life plan. And the friendship they built up in metropolitan areas does not last long. Though we have new patterns such as U-tern and I-tern mobility based on long-term life plan, these are exceptional.

So it is supposed that changing patters of spatial mobility, based on the short-term life plan, are connected with late marriage.